

郷友会の文化活動と教育的機能に関する一考察

山城, 千秋

九州大学大学院人間環境学研究院人間環境学研究院 : 助手 : 教育社会計画学講座

<https://doi.org/10.15017/1004>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 5, pp.177-189, 2003-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン :

権利関係 :

きょうゆうかい 郷友会の文化活動と教育的機能に関する一考察

山城 千秋

1. はじめに

「沖縄は郷友会社会である」と言われる。郷友会は、それぞれの諸事情で故郷の母村を離れ、那覇や県外の都市に移り住んだ人々で構成されている。郷友会の組織化は、そのほとんどが第二次世界大戦後のアメリカ占領下における軍雇用の拡大と、日本の高度経済成長政策による本土への労働力移動と深く関連している。ところが、本土における都市移住と比較して対照的なのは、彼らに移り住んだ都市にあっても、母村の人間関係や伝統的な生活習慣を同郷結合組織である郷友会によって再生産してきたことである。そして、組織形成の契機となる要因は、母村における生活文化体験を共通にしていることである。彼らは、運動会や敬老会、生年祝いなどの定期行事の他に、模合による相互扶助や会報の発行、母村への寄付行為に行事への帰省、更には郷友会墓の建設など、個々人異なる都市生活を基盤にしながらも、都市へソフト・ランディングさせるために、慣れ親しんだ母村の共同性を再現しているのである。従って「沖縄は郷友会社会である」とは、母村である共同体の存在を前提にしていることも意味している。

このような内実をもつ郷友会に着目する理由は、教育学研究における人間関係の構築と地域の共同性に関して、新しい視点を与えることになるからである。現代社会を覆う都市化の進行や生活の合理化、サービスへの委託化という人を介さない間接的行為は、地域の共同性を必要としなくなり、他者との相互行為による人間形成を阻害する結果をもたらしている。換言すれば、都市化と過疎化は、地域から人がいなくなることを意味し、相互行為によって形成される地域への愛着や定住意識は限りなく薄くなり、他者認識を欠いた自己意識は、確立することなく浮遊する人々を確実に増やしてきたのである。もはや物質的豊かさだけでは、人間の成長発達を保障することはできないことは明白である。では、人間形成という視点から郷友会をみたとき、このような急速な都市化と過疎化はどのように映るのか。結論を先取りして言うと、母村を基盤にした人間関係は、見知らぬ群衆の都市に対しては、お互いの仲間意識や連帯感、つながり意識を強め、母村に対しては、村にいたときと変わらない共同体の一員としての一体感が認められるのである。こうした郷友会と母村（地域）の共同性は、都市化と過疎化による人間関係の断絶を当然視してきた言説に対し、都市と農村を結ぶ一つの関係構築のあり方を示すものである。つまり都市が地方からの移住による人口増大の結果として論じられることはあっても、「出身地域」と現住地の都市がどのように個々人の自己意識と属性に影響を与えているかについての研究は意外に乏しく、ここに郷友会の教育的機能に着目

する理由がある。

このような残された課題を補うものとして本研究は位置づき、「都市へ移住した人々が定着するとき、郷友会がどのような教育的役割を果たしているのか」という移住先への定着過程と、その後の母村との関係を同郷組織の視点で考察するものである。

2. 社会教育における郷友会研究の視点

総務庁の統計によると、高度経済成長期に地方から大都市へと移動した人々の数は1億4,000万人に達し、大都市における人口増加のうち、約40%は人口流入による社会増であるという。このような都市と農村の人口移動に対して、これまでの社会教育では「都市のなかのムラ」への実態にはほとんど注目してこなかった。また多文化共生社会をめざす理論においても、差異が顕著であるニューカマーの外国人教育に焦点化するあまり、日本国内の異文化、すなわち全国各地の多様な地域文化の共生や、それらが人口移動によって都市生活に集約されている事実を見落としてきたと言える。社会教育とは対照的に、社会学の都市研究においては、沖縄の郷友会組織に関する実証研究が早くから着手されてきた経緯がある。以下において、まず先行研究の動向を概観した上で、社会教育の立場から郷友会をどのように捉えるべきか、その視点の提示を試みたい。

(1) 郷友会に関する先行研究の動向

郷友会とは、「原則的に、故郷を同じくする者とその家族が、旧来の地縁・血縁を構成原理として、成員相互の親睦・扶助等を基本的な目的とする集団」⁽¹⁾とされ、現在では主に奄美と沖縄に特徴的な組織とされている。郷友会の結成自体は、戦前の「大宜見一心会」にまで遡ることができるが、研究的に注目され始めたのは、1980年代以降のことである。その中で、郷友会が「沖縄社会を把握するキーワードのひとつ」として最初に定義したのは石原昌家である。石原は郷友会を「疑似共同体」⁽²⁾、つまり「都市の中のムラ」⁽³⁾として位置づけ、「沖縄の歴史のなかで、みずからの内発力でこれほどまでの長期にわたる持続的組織活動とその壮大なエネルギーの形成はその例がなく瞳目に値する」⁽⁴⁾として、郷友会の形態と諸機能から沖縄社会の特質と学問的重要性を明らかにしてきた。

吉川博也は、郷友会を「出身地別結社」として捉え、郷友会会員個人の生活史と郷友会活動の相関関係を明らかにしている。それによると、郷友会は「〈不安定期〉＝インキュベーター機能、〈定着期〉＝情緒安定機能、〈安定期〉＝レジャー機能、〈成熟期〉＝名誉認知機能」を果たしているとしている。また、郷友会を「ローカル・エスニシティ」としての概念化を試み、「複数民族によって構成されている東南アジアの諸都市においても、問題解決に有力な方法論」⁽⁵⁾であるとしている。同様に戸谷修も、沖縄の郷友会がインドネシア社会の同郷ネットワークと類似していることを指摘し、より広く第三世界の都市との比較研究の中で理論的に深められる必要があることを提言している⁽⁶⁾。

また関西沖縄県人会及び生活改善運動については、富山一郎の著書⁽⁷⁾が示唆的であり、関東の大都市圏における同郷者結合と集住地域の形成については、桃原一彦の諸論文に集約されている⁽⁸⁾。

その他に、琉球新報社で1979年から193回にわたって連載された「郷友会」や、雑誌『青い海』の特集「郷友会社会の沖縄」(1982年12月号)、『情報やいま』の特集「郷友会・もうひとつの島」(1996年4月号)、「八重山の外の八重山を結ぶ『やいまネットワークをつくろう』大特集」(1999年1・2月合併号)等の情報提供は、一般民衆へ郷友会に対する関心を深めさせる役割を果たした。そして、県主催による郷友会の集大成とも言える「世界のウチナーンチュ大会」の開催は、世界中のウチナーンチュ・ネットワークを構築する場として定着をみている。なお、沖縄県外に組織された県人会は、表1⁽⁹⁾に示すように、国外27か国に56会、国内に106会が確認されているが、その他県内にも市町村単位、字単位の郷友会が網羅的にしかも任意に組織されているため、実数については具体的に把握できないのが現状である。

表1 沖 縄 県 人 会 一 覧

国 外

2001年11月現在

地 域	県 人 会 名	地 域	県 人 会 名
ブラジル	ブラジル沖縄県人会 カンボグランデ沖縄県人会	アメリカ	コロラド州沖縄県人会 アリゾナツーソン沖縄県人会 テキサス沖縄友の会 テキサスエルパソ沖縄県人会 テキサス DFW 沖縄県人会
アルゼンチン	在亜沖縄県人連合会	カナダ	バンクーバー沖縄県友愛会 カルガリー沖縄県人会 レスブリッジ沖縄県人会 トロント球陽会
ペルー	ペルー沖縄県人会		
ボリビア	ボリビア沖縄県人会		
ベネズエラ	ベネズエラ沖縄県人会		
メキシコ	メキシコ沖縄県人会		
キューバ	キューバ沖縄友好協会		
アメリカ	ハワイ沖縄連合会	グアム	グアム沖縄県人会
	北米沖縄県人会	フィリピン	フィリピン沖縄県人会
	北カリフォルニア沖縄県人会	台湾	台湾在住沖縄県人会
	サンディエゴ沖縄県人会	香港	香港沖縄県人会
	サクラメント沖縄県人会	タイ	タイ国沖縄県人会
	ワシントン州沖縄県人会クラブ	シンガポール	星 琉 会
	ユタ州沖縄県人会	インドネシア	ジャカルタ沖縄会
	米国東海岸沖縄県人会	マレーシア	マレーシア沖縄会
	ニューヨーク沖縄県人会	中国	福建省沖縄県人会
	ワシントンD.C沖縄会	フランス	フランス沖縄県人会
	シカゴ沖縄県人会	イギリス	イギリス沖縄県人会
	アトランタ沖縄県人会	スペイン	スペイン沖縄県人会 カナリー沖縄県人会
	ノースカロライナジャクソンビル沖縄県人会	スウェーデン	スウェーデンウチナーンチュ会
	ノースカロライナフェイエットビル沖縄県人会	ドイツ	ドイツ沖縄県人会
	フロリダベンサコーラ沖縄県人会	スイス	スイス沖縄県人会
	フロリダ沖縄郷友会	オーストラリア	在シドニー沖縄県人会
	アラスカ沖縄県人会	ザンビア	ザンビア沖縄県人会
	オハイオ沖縄友の会	ボリビア	オキナワ日ボ協会
	インディアナ沖縄県人会		
	ニューメキシコ沖縄県人会		

国内

2001年11月現在

地域	県人会名	地域	県人会名
北海道地区	北海道沖縄クラブ ゴーヤー会	中部地区	愛知緑沖縄県人会 守山沖縄県人会 愛知豊田沖縄県人会 愛知沖縄県青年会 愛知沖縄同好会 愛知沖縄婦人会 愛知県宮古郷友会 琉球親和会 東海地区宮古郷友会 三重県沖縄県人会 岐阜沖縄県人会 富山沖縄県人会(でいごの会) 石川沖縄県人会 名古屋中沖縄県人会 名古屋東沖縄県人会 愛知県西部沖縄県人会 名古屋沖縄経営者会 (株)沖縄県物産公社名古屋わしたショップ 沖名和会 うるま会 中部地区宮古水産同窓会 名古屋泡盛同好会 三重紺碧の会 豊田紺碧の会 玉城流扇寿会家元 八重山古典民謡保存会 豊田沖縄民謡同好会・かりゆし三糸教室 愛知琉球エイサー太鼓連 琉球芸能館 赤犬子 寿の舞かりゆし太鼓 司重機 琉球民謡協会東海支部
関東地区	東京沖縄県人会 東京沖縄県人会青年部 横浜沖縄県人会 鶴見沖縄県人会 川崎沖縄県人会 ガジュマル会 さいたま沖縄県人会 ちば沖縄県人会 板橋区沖縄県人会 練馬区沖縄県人会 東京三多摩沖縄県人会 相模原沖縄県人会 東京那覇会 関東島尻会 東京名護会 東京久米島郷友会 中央糸満郷友会 関東伊江島郷友会 関東宮古郷友会連合会 東京多良間郷友会 関東平良郷友会 関東下地郷友会 関東上野村郷友会 宮古同志会(伊良部) 関東城辺郷友会 東京八重山郷友会 東京竹富郷友会 東京与那国郷友会 東京大浜郷友会 関東西表島郷友会 関東黒島郷友会 東京波照間郷友会 東京白保郷友会 東京小浜郷友会 関東宮良郷友会 関東平真郷友会 東京ひめゆり同窓会 東京龍潭会 養秀同窓会東京支部 関東城岳同窓会 関東南秀同窓会 関東南燈同窓会 琉泉同窓会東京 昭和女学校同窓会 琉球大学同窓会 関東地区宮古水産高校同窓会 八重山高校同窓会尚志会 関東地区七農高校同窓会 那覇商業高校同窓会 沖縄工業高校同窓会		関西地区
中部地区	愛知沖縄県人会連合会	九州地区	福岡沖縄県人会 長崎市デイゴ会 熊本沖縄県人会 大分沖縄県人会 宮崎沖縄県人会 鹿児島市在住沖縄県人会 八重山郷友会九州バガスマの会 九州宮古郷友会

(2) 三つの教育学的視点

これら代表的な郷友会研究からは、「沖縄は郷友会社会」、「郷友会は疑似共同体」であることが共通認識とされていることが読みとれる。本論においては、先行研究の郷友会概念を踏襲しながらも、人間関係の構築と地域の共同性を明らかにするために、次の三つの教育学的視点から郷友会の分析を試みる。

まず一つめは、生活文化や教育の基盤とされる地域と、「疑似」とされる郷友会との相異、そして相互関係を明らかにすることである。地域自治会や学校などの組織は、地域独占的であることから、家族全体の生活に深く関わりやすく、問題解決や文化創造において重要視されてきた。ではそのような役割は、地域のみの特質なのかどうか。これらのことが明らかになってはじめて「疑似共同体」としての郷友会に妥当性が示されると考える。

次に二つめは、郷友会の結合要因が、母村における共通の生活文化体験を重要な契機としている点である。沖縄出身者による同郷結合には、同じ時間を過ごし、同じ空間を見、同じ言葉で話し、同じ感情をもつことを重要な要素とし、郷友会活動のみならず、労働や日常生活全般にわたって相互扶助的な人間関係を維持・再生産している。そして、このような体験に基づいた故郷概念と、他者との相互作用を通じた自己意識が形成されていると考えられる。

三つめの視点は、母村の共同体の人間関係が、どこへ移り住もうとも切り離されず、現住地を問わずに両者の一体感と、ユイマール（結い）の関係が強く保たれている点である。従って母村の変動は、直接的に一体感をなす郷友会にも影響を与えることから、両者の関係を統合体として考察することを意味する。

郷友会と母村の文化的結合とその伝承、母村に対する主体性と自己意識の課題は、社会教育実践と関わる教育の課題である。情報伝達技術や交通網の発展した現代の多様化社会では、個人が一地域に住み続け、一つの核となる自己意識を維持することは困難であるという考え方があがる。確かに情報化は、国境を超えた伝達を可能にし、交通網の高速化は、長距離移動を日常的なものとしている。しかし地域性を容易に乗り越えていく現代にあっても、郷友会はこのような媒体を活用して、共同体との結びつきをむしろ強化する方向に機能していると思われる。沖縄の人々が外国を含めて外へ向かい、他者との出会いが頻繁になるにつれ、精神的には内へと向かう傾向が伺えるのは、戻ることのできる共同体を実在感として持っていることと無関係ではない。以上のような視点において、本論では特に郷友会の文化活動を中心に考察を加えていくが、同時に母村との相互関連についても随時触れていくことにする。

3. 郷友会の構造と教育的機能の分析

(1) 「疑似共同体」としての郷友会の機能

まず、郷友会が「疑似共同体」とする視点を検討するためには、郷友会との関連においてまず「共同体とは何か」が明らかにされなければならない。その上で「疑似」とされる郷友会との差異

及び関連を明らかにする必要がある。

鳥越皓之は、地域自治会の特徴として次の5つを挙げている。一つが加入単位世帯であること（世帯単位制）、二つめが領土のようにある地域空間を占拠し、地域内に一つしかないこと（地域占拠制）、三つめが特定地域の全世帯の加入を前提としていること（全世帯加入制）、四つめが地域生活に必要なあらゆる活動を引き受けていること（包括的機能）、五つめが市町村などの行政の末端機構としての役割を担っていること（行政の末端機構）⁽¹⁰⁾、である。このような共同体は、全人格的に結びついた基礎集団であり、また可視的に捉えられる「見える共同体」として、実際生活に即した自治的活動の基盤とされる。

一方、都市に形成された郷友会は、仕事や教育などの都合でたまたまその地域に居を構えている人々が故郷を共通の拠り所にして組織した、いわば「地域占拠しない」、「世帯単位制」加入による「見えない共同体」を呈していると言える。その結合形態は、地縁・血縁の結合の仕方によって様々であるが、大きく分けて①県人会、②市町村郷友会、③字郷友会の三形態に分類されると考えられる。例えば、福岡沖縄県人会の会則によると「会員は福岡地区に在住する沖縄県出身者をもって組織する」とし、東京八重山郷友会では、「本会は本土に在住する八重山出身者及びその縁故者をもって組織する」とある。字郷友会である東京大浜郷友会においても、「本会は本土在住の元大浜町出身者並びにその縁故者をもって組織する」と定めているように、会員の規定は出身地域だけである。特に字郷友会の場合、母村の共同体から那覇や県外の大都市に移住したとしても、郷友会という受け皿に任意で家族単位で加入する。郷友会を疑似ながらも共同体と言えるのは、こうした「全世帯加入制」の原則を母村との統合体で捉えられるからだと言える⁽¹¹⁾。

次に、「包括的機能」については、会則の目的から検討すると「本会は会員相互の融和と親睦並びに会員の社会的地位と福祉の向上を図り、ひいては郷土の発展に寄与することを目的とする」（福岡沖縄県人会）とあり、先ほど触れた東京八重山郷友会と大浜郷友会の会則をみてもほとんど変わりはなく、どちらにも共通するのは、「会員の親睦」と「郷土の発展に寄与」する点にある。

表2 在沖郷友会における目的と行事一覧

目的・行事 地域別	郷友会数	郷友会の目的		運 動 会	敬 老 会	母村年中 行事への 参 加	学 事 奨 励 会	母村年中 行事を那 覇で催す	会誌及び 記念誌の 発 行
		親 睦	母村との交流						
本島北部	57	22 (39%)	12 (21%)	33 (58%)	28 (49%)	15 (26%)	22 (39%)	4 (7%)	4 (7%)
本島離島	57	24 (42%)	13 (23%)	36 (63%)	36 (63%)	9 (18%)	16 (28%)	0 (0%)	4 (7%)
本島中南部	4	4 (100%)	1 (25%)	3 (75%)	3 (75%)	2 (50%)	1 (25%)	0 (0%)	0 (0%)
宮 古	45	24 (53%)	3 (6%)	23 (51%)	24 (53%)	6 (13%)	5 (11%)	1 (2%)	4 (9%)
八 重 山	18	6 (33%)	3 (17%)	13 (72%)	10 (56%)	2 (11%)	1 (6%)	2 (11%)	3 (17%)
合 計	181	80 (44%)	32 (18%)	108 (60%)	101 (56%)	34 (18.8%)	45 (25%)	7 (4%)	15 (8%)

それを具体的に在沖郷友会の目的と行事を示したのが、表2である⁽¹²⁾。

郷友会の目的として明記されたものは、「親睦」が44%、「母村との交流」18%である。その目的を達成するために、「運動会」60%、「敬老会」56%、「母村行事への参加」25%、「学事奨励会」18.8%を行っている。また母村に対する活動として「母村の年中行事への参加」は25%であるが、比較的母村に帰りやすい本島北部の郷友会では39%となっている。これらのことから、郷友会はあくまでも親睦と交流を目的としているが、一方の母村にとっては「包括的機能」の一部を郷友会に支えられていると言えるだろう。現実には郷友会の活動は、母村の振興に大きな役割を果たしており⁽¹³⁾、母村と郷友会の相互扶助関係からみても、統合体として考えることができる。なお、地域別に見た場合、行事にばらつきが伺えるが、それは母村との地理的距離や、母村の経済・社会状態、郷友会の規模などによって影響を受けているものと考えられる。

総じて郷友会は、都市に移動してきた人々と母村との関係維持を主眼にしながら、地域横断的で重層的なネットワークを形成し、母村の補完的役割を担っていると指摘できる。つまり、都市社会に対しては内へと向かうベクトルをもち、母村に対しては外へと向かうベクトルをもつ。また郷友会への加入は任意であり、半強制的に行事へ参加させたり割り当てるような性質のものではないことから、現住地の実状に適合するように様々に変化していると考えられる。

(2) 母村における生活文化体験の共有

故郷というのはあらかじめ存在しているのではなく、移動したことによって発見されるものとしてある。従って故郷の成立は、移動が行われることによって始まるのである。沖縄県内における郷友会の形成も、農村・離島から那覇への移動によって、もと自分がいた地域を振り返ることによって、故郷が発見された。

その故郷概念が成立していくときに、次の三つの事柄が特に強調される。一つは歴史という過去の時間を共有していること、二つめは同じ風景・空間をもつという感覚であり、三つめに言葉を同じくするという意識であり、その地域の言葉で感情を表すという主張である⁽¹⁴⁾。そのような故郷概念を共有するためには、故郷、すなわち母村における共同性と生活文化への体験が前提となる。沖縄県内各地は、集落毎に祭祀が多いことが特徴であり、それぞれの集落で独自の祭り・行事をもっている。祭りや行事に限らず、集落の生活文化の中には、異世代との結合と相互交流を喚起する共同の教育が内包されている。例えば沖縄文化の大きな要素を占める民俗芸能の継承は、共同でいかに関わり合えるかに依存している。同様に、文化を継承する後代が成長できるかは、先代が周辺的参加の間口をいかに広げるかに依存している。日常的な生活文化の諸事象には、そうした共同による相互作用が体験に前もって作用を及ぼしているのである。

それでは、母村における日常的な生活文化の体験が、離村した後どのような自己意識を形成し得たのか。具体事例として、他者との出会いが沖縄内部より激しく、しかも異文化社会の中の同郷組織であるブラジル移民青年隊を手がかりに見ていく。青年隊出身者に対する調査結果⁽¹⁵⁾を表したのが、表3である。なお彼らの渡航時の年齢は、平均して20～22歳(68.3%)であった。

まず、故郷概念の要素を全て満たす民俗芸能への関心について問うたのが設問1である。関心があると答えた人が76.7%を占め、大多数が民俗芸能への周縁的参加もしくは主体的参加という体験を持っているものと考えられる。そして設問2の関心のあるものについては、方言によって故郷の情景を唄う「民謡」が55%、技の獲得を擁する「三線」が30%、そして「舞踊」28.3%である。設問3は、関心を持ちはじめた時期であるが、渡航後に関心を寄せた人が46.7%と多いことが分かり、ブラジルという異郷において、故郷の文化を発見したものと考えられる。そのきっかけとして自由記述を求めたところ、「初めての故郷訪問で親戚の者たちが行っているのを見て」、「ふるさとが恋しい」、「兄が仕事後、時間に構わず三線を弾いていた」、「生活が楽になったから」、「県人のつどい」などの理由があげられた。

彼らがブラジル社会で育った子や孫に受け継いで欲しい沖縄文化についての複数回答が設問4である。最も多かったのは「ウチナーンチュ意識」56.7%で、次いで「トートーメー」（位牌の継承）46.7%、そして「沖縄語」43.3%である。ブラジルへの沖縄移民たちの多くは、自分たちの言語や文化は劣等なものであり、ブラジル人・日系人になるためにはそれを放棄しなければならないと考えるよう教育を受けてきた。そのため、彼らのウチナーンチュ意識の表面化は、沖縄移民に対する差別の克服と、多民族社会の中で沖縄文化の独自性を獲得することと深く関連している。沖縄語、すなわち言語にしても、話し、そして伝達する共同体が存在するところに実在しうるのであり、その話者を失えば、特に若い世代が学習しなければ、言語は危機に陥る。マイノリティの沖縄文化と言語の存続を支えるためには、ウチナーンチュ意識の確立が必要であると、この回答から指摘できる⁽¹⁶⁾。

以上の結果から、青年隊出身者は渡航前において、母村における生活文化体験をもち、その体験

表3 ブラジル移民青年隊へのアンケート調査結果

設問1. 沖縄の民俗芸能への関心

(1) 非常にある	18 (30.0%)
(2) 少しある	28 (46.7%)
(3) どちらとも言えない	3 (5.0%)
(4) 無関心	3 (5.0%)
(5) 不明無回答	8 (13.3%)

設問2. 関心のあるもの（複数回答）

(1) 三線	18 (30.0%)
(2) 民謡	33 (55.0%)
(3) 古典音楽	14 (23.3%)
(4) 舞踊	17 (28.3%)
(5) 琴	1 (1.6%)
(6) 笛	3 (5.0%)

設問3. 関心を持ちはじめた時期

(1) 渡航前	10 (16.7%)
(2) 渡航後	28 (46.7%)
(3) 不明	8 (13.3%)
(4) 無回答	14 (23.3%)

設問4. 次世代へ残したい沖縄文化（複数回答）

(1) 沖縄語	26 (43.3%)
(2) 沖縄料理	21 (35.0%)
(3) トートーメー	28 (46.7%)
(4) 民俗芸能	25 (41.7%)
(5) ウチナーンチュ意識	34 (56.7%)
(6) ユイマールの精神	11 (18.3%)
(7) 生活習慣	21 (35.0%)
(8) 不明無回答	8 (13.3%)

に根ざした故郷が異文化の中で発見され、その故郷の文化は自己意識と結びついている、とまとめられるだろう。そして、彼らが母村で体験してきた言葉や伝統的生活習慣、固有の伝統文化芸能、門中組織などの多様な文化的差異は、日系社会に県人会を、更に沖縄系社会に郷友会を結成させ、ブラジル社会にソフト・ランディングするための知恵を同郷の共同体の人間関係に求めたのである。

(3) 母村と郷友会のユイマール～文化活動を通して

これまで一般的に、労働力の農村から都市への移動は、従来の伝統的な共同体を解体させ、都市には互いに疎遠で見知らぬ人々が群がる空間を生みだし、農村で培った同郷意識や生活文化は、移り住んだ都市生活の中で消滅させてきたと説かれてきた。同様に、地域の共同体を語る場合、伝統のしがらみや閉鎖性、過疎化と言った常套句に見られるように、静的な共同体として否定的に捉える傾向がある。しかし、その共同体も都市と同様に大衆化、都市化、情報化という外社会の影響を受けながら変動しているのであり、沖縄の場合、郷友会を含む人間関係を基盤にしながら動的に再構築されていると考察する必要がある。

具体事例として示す黒島は、八重山諸島竹富町に属する約200人が暮らす小さな島である。戦後は復興と共に島民が帰村し、1948年には人口が約2,000人へと増大した。しかし、人口増大は農業生産の低下や食糧不足、水の欠乏などをもたらし、必然的に他島へ職を求めて移住する者が増え、結果的に深刻な過疎地域となっている。また、中学校を卒業する青少年も進学のため必然的に島を離れていく。その黒島は八重山諸島の中でも民俗芸能の宝庫といわれる。結願祭には黒島固有の芸能が多彩に奉納され、豊年祭では、民俗芸能の演舞の他に、爬竜船競漕が繰り広げられ、海岸には約800名もの歓声が沸き上がる。旧正月には、ニライから豊作を引き寄せる綱引きが行われ、五穀豊穡を願う人々で賑わうのである。

対照的な状況を述べたが、これが黒島の姿であり、過疎でありながらも、盛大な祭祀行事を可能とするのが郷友会の存在である。1956年に石垣在住黒島郷友会、1958年頃に沖縄在住黒島郷友会がそれぞれ結成され、県外には関東黒島郷友会と関西黒島郷友会も組織されている。石垣在住郷友会は5つの小集落の支会が網羅的に組織され、結願祭や旧正月は、各小集落毎に各支会が帰り、祭りを支えているのである。特に豊年祭は、島あげての一大行事であり、郷友会の帰省は300から400名規模にもなり、祭り全般にわたる運営と協力が、母村と郷友会が一体となって行われる。そして民俗芸能を継承する郷友会青年部の二世、三世にとっては、黒島は生まれ島ではないにしても、親の故郷とは伝統文化を介して意識の中で結合していると考えられる。外来者からみれば、黒島の伝統がその島で保存継承されているように見えるが、現実には島外に生きる郷友が島外においてその芸能を継承しているのである。現実的な過疎という地域課題に対して、郷友会は母村の包括的機能の一部を担うことによって解決を図ってきたのであり、両者を統合体として捉えることの意味がそこにある。

その郷友会も結成から前半世紀が経過している。その構成員も二世、三世へと変わり、実際に黒島に住んだ体験のない世代が増加し、過渡的段階だとも言われている。しかし母村・郷友会双方に

とって互いは、必要不可欠な存在であり、ユイマールによって支え合うことを当然視する姿勢には、「島は一つ」とする思想を伺い知ることができる。

4. 新たな同郷ネットワークの形成と今日的課題

今年、沖縄は本土復帰して30年目を迎えたが、この間の沖縄の政治・社会変動と文化変容の実態は大きく様変わりしてきた。かつて「沖縄的なもの」は、差別の対象とされ、戦後の沖縄出身者は、戦前と同様な沖縄差別を受け、日本人からの視線が「傷痕」として深く歴史に刻み込まれてきた経緯がある。復帰後、本土社会における沖縄理解は深まり、差別の度合いは急速に希薄化し、そのような事実も過去のものとなろうとしている。一方の沖縄社会には、本土化の波が怒濤の勢いであらゆる分野に押し寄せたが、中でもマス・メディアを介して全国画一の価値志向が若者を中心に形成されてきた。特に学校教育では、本土への進学や就職を想定して、日常的な使用言語が標準語となり、方言が通用しなくなった。復帰後わずか数年間で基層文化の言語が若い世代から消滅していった結果、本土への進学率も向上し、教育水準も高くなったとされた。

ところが、本土文化が平準化された1980年代後半になると、本土からのまなざしで「故郷の発見」学習が出始める。沖縄文化の危機を感じた学校現場では、運動会に民俗芸能を種目に取り入れたり、課外活動に三線が導入されたり、学芸会に方言劇を開くなど、状況は様変わりしたのである。そして社会全般において、地酒と家庭料理が味わえる居酒屋や民謡酒場が急に増え始め、各地で消滅していた芸能文化が復活してきている。さらには、本土化の流れの中でウチナーンチュとしての自覚を確認するかのように、伝統文化の再生と、文化的価値を再認識する学習や講座などが生まれている。

このような母村沖縄の動きに呼応して、本土在住沖縄出身者の間にも再び芸能の継承が盛んに行われるようになり、郷友会においてもウチナーンチュとしての誇りをもたそうとする動きへと変化し始める。それだけではない。1990年前半の復帰20周年を契機に「沖縄ブーム」が起こり、島唄をベースにしたポップスグループの人気と相まって、沖縄芸能の波紋は、「ヤマトウチンチュ」にも受け入れられていく。その頃から例えば東京沖縄県人会青年部には、母村沖縄と関係を持たない青年達が「エイサーが好きだから」という理由で入会し始めたという。同様に「エイサー好き」であれば、出身地を問わずに入会できる太鼓集団が多く結成されてきた。

そのような傾向は、近年結成された福岡大学の沖縄県人会組織にも見ることができる。沖縄の基地問題が大きく取り上げられていた1997年、福岡大学では沖縄出身の学生を中心に沖縄の現状や歴史、文化を紹介する「沖縄展」が開かれた。その中で沖縄を訴える手段としてエイサーが企画され、沖縄出身者を中心に演じたのが会のはじまりである。企画後、「いちゃりばちようでい会」として会を立ち上げ、沖縄出身者だけでなく本土学生の参加も当初から認めてきた。現在は「沖縄エイサー隊」と改名、今年度の会員は18名、その内10名が沖縄出身者である。このような太鼓集団の活躍は、県外において沖縄文化を媒体に本土と沖縄の「異文化交流」、「異文化理解」を深めるために有効で

あり、それが「沖縄＝エイサー」という構図を定着させてきたと言える。

今後も、母村沖縄との関係を繋ぐ集団は、文化的要素の多彩さから考えても、広範になると予想される。その一つに小林香代は「エイサーは沖縄の人でないと踊れないのか」という問題を提起し、あえてエイサーを沖縄と切り離れた形で、エイサーの価値の共有化を非沖縄出身集団で試みたように⁽¹⁶⁾、エイサーそのものの価値に新たな変化が生まれている。このような動向は、地域の共同性を文化活動から考察する者にとって、看過できない今日的課題を示している。「エイサーを踊る」という行為は、地域の共同性に根ざした伝統文化の共有が前提にあり、エイサーを習う過程には、地域の大人たちとの相互行為が頻繁にあり、技を獲得するだけでなく「時間的普遍性」の中に自らを位置づける学習が持続されていることを意味する。そのような学習の蓄積が、地域への定着意識を深め、よりよく地域を運営していくことへの責任意識を養い、地域との関わりを重視する自己意識を形成し得るのである。地域文化の一部を析出し、生活を細分化して捉えることは、社会を創りあげる人間形成の観点を落とし、地域における共同性の意義を見失わせてしまう。

機能分化した集団が数多く結成される今日の社会において、郷友会が母村に対する包括的・補完的役割と教育的機能を有し続けるためには、このような新しい集団との比較も検討しなければならない。そのためには人間の自己意識の解明と同時に、文化形態の内実と継承を問う必要がある。その上で、郷友会と母村・現住地との多様な結びつきも明らかにされなければならないだろう。

註

- (1) 玉城隆雄、稲福みき子「郷友会と地域社会(1)——方法論を中心に」『沖縄国際大学教養部紀要』、第16巻第17号(通号)、1991年 86頁
- (2) 石原昌家「疑似共同体社会としての郷友会組織」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第8巻第1号、1980年 48頁
- (3) 石原『郷友会社会——都市の中のムラ——』ひるぎ社、1986年
- (4) 石原 前掲書、10頁
- (5) 吉川博也『那覇の空間構造——沖縄らしさを求めて——』沖縄タイムス社、1989年 132頁
- (6) 戸谷修「那覇における郷友会の機能」山本英治、高橋明善、蓮見音彦『沖縄の都市と農村』東京大学出版会、1995年 239頁
- (7) 富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社、1990年
- (8) 桃原一彦「沖縄を根幹として」奥田道大『都市エスニシティの社会学——民族／文化／共生の意味を問う——』ミネルヴァ書房、1997年、「大都市における沖縄出身者の同郷者結合の展開——集住地域・川崎を中心に」東京市政調査会『都市問題』2000年9月号などを参照。
- (9) (財)沖縄観光コンベンションビューロー『美ら島——沖縄県観光情報ファイル——』2000年 705-713頁
- (10) 鳥越皓之『地域自治会の研究——部落会・町内会・自治会の展開過程——』ミネルヴァ書房、

1994年 9頁

- (11) 具体的に石垣市宮良を例にすると、母村の部落会は325世帯、在沖宮良郷友会は407世帯、宮良赤馬会（石垣市中心部の郷友会）88世帯、関東宮良郷友会142世帯、関西宮良郷友会37世帯、東海地区宮良郷友会5世帯が加入している。それぞれの郷友会会員は、居住地は別としても宮良という母村を中心にネットワークしているのである（世帯数は、1999年11月現在）
- (12) 表2は、吉川博也の前掲書に掲載された表（p.117）を参考にした。同表は、琉球新報社編『郷友会』（1980年）に掲載されている189会のうち、沖縄県以外の8会を除いた181会を対象としている。活動の目的である「親睦」と「母村との交流」は、殆どの郷友会がそれらを目的にしているが、ここでは文中に記載されているもののみを取り上げている。
- (13) 例えば、伝統芸能の継承や母村の行事運営における物心両面の支援をはじめ、また台風災害支援や記念事業における寄付金の協力なども多く聞かれる話である。
- (14) 故郷概念の検討については、成田龍一、藤井淑禎、安井真奈美、内田隆三、岩田重則『故郷の喪失と再生』青弓社（2000年）に詳しい。
- (15) ブラジル移民青年隊とは、沖縄産業開発青年協会によってブラジルに移民派遣された沖縄青年達の現地組織である。第1次派遣の1957年から第14次の1966年まで、総勢320名の青年がブラジルに渡った。本調査は、1998年1月にブラジル在住の会員に対してアンケート調査を行ったものである。消息が明らかな112名に郵送し、60人より回答を得た。回答率は53.6%である。
- (16) ここでは詳細に述べることができないため、ブラジルにおける沖縄文化の継承と現状については、ブラジル沖縄県人会『ブラジル沖縄移民史——笠戸丸から90年』2000年を参照のこと。
- (17) 詳細は、小林香代『演者たちの「共同体」——東京エイサーシンカをめぐる民族誌的説明——』風間書房（2001年）を参照のこと。

An Investigation into the Cultural Activities and Educational Roles of Okinawan *Kyouyukai*

Chiaki Yamashiro

Okinawa is often described as a “society of *kyouyukai*”, a term which refers to an association consisting of Okinawan people who migrated from the same home villages to more urban city areas. In comparison with their counterparts in mainland Japan, Okinawan migratory people have demonstrated some distinctive characteristics by reproducing their own traditional customs and lifestyles through *kyouyukai* even in an alien urban environment. The formation of *kyouyukai* has been encouraged by the fact that members have common living and cultural experiences in their home villages. In other words, the statement that “Okinawa is a society of *kyouyukai*” presupposes that Okinawa consists of a number of village communities.

Many studies in the area of Adult Education have tended to treat cities and the villages as entirely separate entities when analyzing the educational aspects of migration movements between villages and urban areas. Surprisingly, however, too few of them take account of the fact that many urban residents had in fact originally migrated from villages. Specifically, the majority of previous discussions only succeeds in explaining urban development in terms of the increase in the number of migratory people and fails to address how their hometown communities and current living environment have affected the formation of their identity and the sense of belonging.

This paper intends to address this deficiency in previous studies by focusing on the educational roles played by *kyouyukai* during the process of urban settlement and on the relationships between *kyouyukai* and home villages after the initial settlement has been completed.

More specifically, the paper analyzes the educational aspects of *kyouyukai* in the following three ways. First, the paper highlights the differences and relationships between home villages (which primarily provided educational and everyday cultural backgrounds to migratory people) and *kyouyukai*, which are considered to form a para-community of hometown communities. Second, the paper points out that shared experience of everyday cultural activities in home villages has been a significant binding force for *kyouyukai*. Third, the paper illustrates the fact that communal ties in these home villages are not easily breakable and a sense of unity and *yuimahru* (an Okinawan concept connoting a spirit of mutual support) are strongly maintained no matter where Okinawan people migrate to.